

己に勝つ道

真の英雄

仏のことを「世雄」という、雄とは、世間では「英雄豪傑」と綴られる字である。世尊は、世の中の英雄豪傑中の英雄豪傑であるから、世雄というのである。世尊は極雄傑である。真の英雄である。であるから世尊のことを世英とも言うのである。

世尊は、何故に世の真の英雄なのであるか。それは、真実の智慧によつて自己に克ちたもうたが故である。無涯底の智慧海によつて一切に勝つて正覚を成就したもうたが故である。

尊者阿難は、大経のまさに開説せられんとするに当つて、「今日世尊、奇特法に住し、今日世雄、仏所住に住し」と、如来の五徳を念じた。

憬興の『述文讚』には、この第二の「今日世雄、仏所住に住し」の文を解釈して、「普等三昧に住し、能く衆魔雄健天を制するが故なり。」と言つた。

普等三昧のことは第四十五願に出ている。云く、

「設ひ我仏を得んに、他方国土の諸菩薩衆、我が名字を聞かば、皆悉く普等三昧を逮得せん。是の三昧に住して成仏に至るまで、常に無量不可思議の一切諸仏を見たてまつらん。もし爾らば正覚を取らじ。」（住定見仏願、又は常見諸仏願）

聞其名号信心歡喜と、名号の説かれるを聞かば、普等三昧に住すると言われる。この普等三昧に住する者は、成仏に至るまで無量不可思議の一切諸仏を見たてまつると言われるのである。普等三昧とは、又、平等三昧と言われる。普徧平等なる法を念ずる世界だからである。しかしこの三昧は、仏の名号を聞いて得ると言われるが故に、浄土門において具体的には念仏三昧のことである。普等三昧とは念仏三昧のことである。真実の念仏三昧は普等三昧でなければならぬ。平等一如の世界に通じない念仏三昧、即ち普等三昧でない念仏は真実ではないし、普等三昧も具体的には念仏三昧であるところに、如来本願の世界、即ち浄土門の意義があるのである。普徧常恒の涅槃の徳は名号の中に摂在するのである。

今、住仏所住とは、この普等三昧、即ち念仏三昧の世界に住したもうのであると説かれるのである。この憬興師の釈は、まことに卓抜した識見と言わなければならぬ。

智慧

世尊は、普等三昧、即ち念仏三昧の世界において廣大なる智慧に住し、「衆魔雄健天を制したもう」のである。雄健天とは第六天の大魔王のことであつて、世尊の正覚に當つては、無量の眷族と共に正覚のみ座に出て、正覚の邪魔をせんとした大魔王である。魔王の名を破句と言われる。破句とは略して極悪という。かつては十善の力により、又、三宝に帰依した徳によつて、この第六天王となりつゝ、今は三宝の恩を忘れて、ただその幸福の為に悪逆を行ずるが故に、極悪、即ち、破句と言われるのである。

世には破旬の子の多きことである。三宝の徳、世尊聖人の徳に巣くいつつ、特権を知って、三宝を奉せず、威張ることを知って、念仏なく教化なく、かえって大法の広まりたもうことの邪魔する者、悉く破旬の子にあらずや。日本国土の広大なるお徳の中にいつつ、貪欲によつて享樂のみを追い、悪逆非道を行ずる者は破旬の子にあらずや。

衆魔とは、内魔外魔、即ち煩惱魔、五陰魔、死魔、天魔等の四魔ことごとくを言うのである。この一切の悪魔を制して降伏せしめ、その慈悲海に、その傲慢邪見を懺悔せしめて、法界一塵として、その正覚の智慧光に統一せられざるなく、無碍の智見は何者もこれを障碍すること能わざるに至つたのである。であるが故に、世尊と言ひ、世雄と称え、世眼と嘆じ、世英と仰ぎ、天尊と讃えるのである。

しかしながら世尊のこの無碍の威徳は、そのまゝ本地法身の徳、無碍光如来の別徳に外ならない。世尊は今、本地法身の徳を、その念仏の境において現したもうたのである。

大法に敗けて己に勝て

世尊は一切に勝ちたもうたので世に勝ち、己に勝ち、外に勝ち、内に勝ち、永遠の勝利者となりたまうのである。己に勝つ者は真の英雄である。如何に人間的な才覚のある人でも、時に悪魔の一兵卒によつてその全体を亡ぼす。これ全人の願い、菩薩の本願の世界を知らないが為である。

如何にして己に勝ち得るか。悪魔に勝ち得るか。いわく、己に勝つ者は如来に敗ける人である。大法に敗ける人である。如来本願の前に邪見の頭を下げず、大法の前に傲慢の頭を下げず、大法を曲げ、如来を無視して、無慚無愧なるものは、自己に敗け、悪魔に敗けるものである。

大法をぬきにしては智慧を成就することは出来ない、如来をぬきにしては信心の智慧を成就することは出来ない。しかるに、如来の大慈悲、智慧海に帰入せず、法を曲げ、僧、即ち善知識の仰せに随わずして、己の我をつのるものは、そのまま、己に敗け、悪魔に勝たしむるものである。

故に己に勝たんとするものは如来に敗けよ。

諸仏

普等三昧を得るものは、「成仏に至るまで、常に無量不可思議の一切諸仏を見たてまつる」と第四十五願に誓われてあつた。これは又、見のがしてはならぬことである。念仏三昧にして真実ならば、必ず、そこに一切諸仏が現前しますのである。諸仏は、念仏の人、真実金剛の大信心を、証誠し、護念し、讃嘆したもうのである。この諸仏証誠の語に随順せざる信心は、教主世尊の教えにもまた随順せざるものである。教主善知識の教に違背するものは、本仏の名号を真実に聞信せざるものである。弥陀、釈迦、諸仏、この三仏をあぐれば、法界を尽くすのである。全法界を得るか、全法界に反逆して一切を失うか、それはかかつて、念仏の心の純不純による。恐れても恐るべきは、内心に巣くう自力心、仏智疑惑の心である。

世には、本願に相応して念仏するかに見えても、我慢にもの言わせて、世の誰をも感動せしむるものを持たず、まさかという時には、大法にものを言わせずして、我によつて行動し、何時までもく、善知識をして泣かしむるものあり。多くの念仏の同胞をして悲痛せしむるものは、諸仏証誠を得ざる種類の人である。人間の享樂のために、一人暗に走り、世間の名利のためには、富者、権勢、追従者の言を、天籟の妙音の如く受け取って、多くの念仏の同胞さえ棄て去って厭わぬものがある。

人生一見渾沌として秩序なく、真実を求めて歩まんとすれども人認めず、正法に忠実なるが為に世の俗難を受け、悪罵嘲笑の的となり、無碍ならぬ有碍の荊棘の道となるが如く見えることがある。しかし大法に忠実なるものは、必ず、内に無碍の道味を知るであろう。ただ真実に最勝の直道たる本願の一道を歩む、そこにのみ不可思議一切諸仏の証誠の世界がある。真実の智慧はただこの世界においてのみ開けて来るのである。

ゆめ／＼世の煩惱の巷に雑縁を求めて正念を失つてはならない。正法に帰依し、仏に帰依し、聖人に帰依し、一貫相統して、念仏の一道にあれ。三宝に敗れるもののみ、己に勝つであろう。勝つとは、口論し我慢を通して他人に勝つての謂ではなく、敗けよとは、悪魔煩惱に敗けよというのではない。如来の智慧光のみ、悪魔煩惱に勝ちたもう。

されば、信心の智慧によつて生かされるものは、罪惡も業報も魔界外道も障碍することなき一道を行くであろう。人、悪心によつて汝に向う時、汝もまた悪心によつてこれに対抗するは、悪魔をして使たよりあらしめ、念仏を失えるものである。三仏現前したもうところ生きる時、道は明らかに見える。この道をゆく者のみ、よく己に克つであらう。

真の強者とは何者をいうのか。それは、ただ一貫相統して道を生きぬく者のことである。如何なる軟弱なる者も、大法を聞き、大法の如く一貫相統することによつて真の強者となることが出来る。如何なる強者も大法なくば、それはただ虎狼の強さである。真の強者というべからず。

大法に敗けて己に勝て。惡と知れば頭を下げ法に敗け得る者は、希有最勝の人である。真の人であり、如来によつて菩薩と呼ばれる人である。